

社会主義思想と救済論

鬼頭 孝佳 (名古屋大学文学研究科博士後期課程)

社会主義思想は無神論の下でしか成立し得ないのだろうか。しかし、厳密な意味で無神論は有り得るのだろうか。本発表では、社会主義思想と宗教とがどのように交錯し、どこで切断されるのかを、考えてみたい。

マルクスは『ヘーゲル法哲学批判・序説』で、「宗教は、なやめるもののため息であり、心なき世界の心情であるとともに精神なき状態の精神である。それは民衆のアヘンである。」と述べている。この語は後世、「反宗教」や「無神論」の言説資源として用いられてもいるが、元来は民衆の苦痛を和らげる宗教の鎮痛剤の機能と専制支配を受忍させる毒薬の機能の双方に着目した発言であった。また『資本論』第1巻で、マルクスが貨幣のフェティシズムに言及することも、一神教の偶像崇拜への戒めと関心を共有している。新実在論の旗手であるガブリエル・マルクスは物神崇拜への戒めとしての宗教を評価し、イデオロギー機能としての宗教を批判するが、このような宗教観はマルクスのこのような両義的な見方を継承しているはずである。

では、偶像崇拜への戒めとイデオロギー機能の切断線はどこに認めることができるだろうか。この問いは、ある言説が唯物論的か、観念論的かを判断することとも通底するはずである。というのも、アルチュセールが『国家とイデオロギー』で適切に述べるように、「イデオロギーはけっして《私はイデオロギーである》とは言わない」からである。つまり、イデオロギーは信じている当の本人にとっては現実そのものとしてしか映らない。アルチュセール自身が晩年に「出会いの唯物論」に沈潜するのも、かつては「偶像崇拜批判」だと信じていたものが、「偶像」に他ならなかったことに気付いたからである。偶像崇拜批判も偶像に転化し得る。偶像崇拜の戒めとイデオロギーは、紙一重の関係でしかないからこそ、明証的には判別しにくいのではないだろうか。例えば、阿弥陀如来への絶対的帰依を説く浄土真宗が思想構造として、反戦思想に傾くか、皇国思想に回収されるかが紙一重であったように。

そう考えれば、無宗教が社会変革に有為にも見える。だが、そもそもイデオロギーに外部は無いはずで、人間が象徴秩序の中で生を営む以上、イデオロギー無き生は有り得ない。今日のグローバル資本主義世界で、我々は生まれつき多かれ少なかれ、独善的な「市民宗教」(ルソー)の中を生きていることを無神論は忘却させてしまう。ホイッグ史観に淵源する進歩史観やその亜種としての近代化論は、「市民宗教」を強化する方向に作用する。すなわち、生産力を向上させ、生産された財の分配が社民主義的であるように、技術官僚が社会制度を「適切」に設計すれば、楽観的に問題が解決するという風に。しかし、ベンヤミンが『歴史哲学テーゼ』で注意を促したように、我々は寧ろ過去を「救済」しなくてはならないのではないか。しかも、勝者の歴史に閉ざされた主流ではない過去を。そのような非主流の地下水脈の探求が「他者」を開示し、偶像崇拜批判に不可欠の「外部」を導入させるはずである。フーコーがイラン革命で目撃した民衆の蜂起に、そのような宗教的情熱の結晶を見ることが出来よう。